

社会・経済システム学会

第19回大会報告要旨集

大会テーマ

「システム論を問い直すー新世紀のシステムをデザインするー」

日時 2000年11月25日(土)・26日(日)

会場 奈良女子大学

社会・経済システム学会 2000年度大会実行委員会
大会委員長 長嶋俊介(奈良女子大学生活環境学部)
事務局 野田 隆(奈良女子大学大学院人間文化研究科)

生活世界の科学から問われるシステム概念

金蘭短期大学
三石博行

科学技術文明の成立を人類の歴史に刻みながら 20 世紀は終わろうとしている。豊かな社会や生活への限り無い追求によって導かれたこの文明の負の遺産も人類の歴史に問題を投げかけている。今世紀の後半期以降人間社会学の中でこれに関する問題提起がされて来た。その一つとして「生活世界の科学」を取り上げることができる。

生活科学と呼ばれる生活世界の科学は、より良い生活を営むための科学・生活経営学として、19 世紀アメリカ社会で工業化によって失われようとしていた生活を課題にしたビッチャーやリチャーズによって構想された。この新しい科学が成立するためには、近代科学の伝統である科学方法論の検討が必要となっていた。

今井光映は、現在までの生活科学の辿ってきた過程を検討する中で、生活を分析的に捉える方法では人間生活の部分的な側面に生活学の課題を押し込めてしまう危険を孕んでいることを警告し続けた。今井は生活を一つのトータルな複雑系のシステムと考え、全体論的な学問として生活学をイメージした。彼の生活学の方法論は生活主体の価値を前提に成立する批判学・解釈学であり、その方向は因果関係を明らかにする事で終わる没価値的な実証科学ではなく、全体論的に「生活を癒すこと」を課題にする理解科学であると考えた。生活改善の実践的知性を課題にする考えは、貧困生活から勤労者の救済を考えた籠山京や生活改善運動の生活病理学を構想した今和次郎の生活構造論にその原形を見ることができる。今日、生活改善の課題は政策学として受け継がれている。

今井光映は生活学を、実践科学と理論科学の相互矛盾要素によって作り出される知の相互運動システムを前提に成立するを理解科学として位置付けた⁽¹⁾。全体論的な学問としての生活学・理解科学は、近代合理主義の形成以来現代科学技術文明の確固たる理念となった「知は力なり」という実践理性の擁護と、因果関係の明晰な分析的方法や実証科学の基本的な方法に対する批判を前提に立っているのであるが、それが根拠とする理論科学も近代合理主義的な理念や現代科学技術の先端から導き出される知性の配列集合であり、主体の自己認識のための哲学的知と認知問題を扱う心理学的知性の相互批判システムを示す科学性は語られなかった。理解科学の成立条件として、第一番目に、一つの事象に関して、異なる幾つかの公理系からの相補的解釈を導く新たな公理の発見を課題に学際的研究の科学性が問題になり、第二番目に、相対性理論に関する哲学的議論が示すように、観察対象を通じての観察主体の自己認識のあり方を問う科学性が問題となっていた。生活世界の価値観を前提にして成立しようとする生活学の科学性の成立条件が問われることになる。

吉田民人は、自己組織系の科学の成立条件として、まずシステムの秩序プログラム・規則の解明が課題となり、さらにその規則の生成とその動作・保持・変容を支配する法則が問題になると考えた⁽²⁾。この視点から生活世界の情報科学は、生活情報の秩序プログラム、つまり生活資源のパターンの生成、伝達、貯蔵と変換に関する規則性、生活資源を構成している要素間の関係方程式が課題になる。生活情報の秩序プログラムは生活空間の歴史性や文明性によって決定されており、生活空間と生活情報の相補的關係から成り立つ社

会文化理論が生活情報に関する法則として導き出されることになる。

また、歴史性や文明性を前提にして成立している生活情報処理システム・生活情報処理主体やその秩序プログラム・認知構造とは、社会文化的パラダイムに規定された言語情報-内生選択機能を持っているため、生成・選択・固定された自己認識や対象パターンと秩序プログラム・表象の体系・イデオロギーとは相補的關係にある。従って現実の生活世界では、生活処理機能によって言語情報的に選択された生活空間のパターン・生活世界の情報が発生し、それが同時にその生活情報処理機能を決定している。その運動の關係が秩序プログラム性の自己組織系と呼ばれるものである。このようにして、意識は社会的環境に規定され、社会的環境は意識によって再生産されるのである。この相互運動を導くものとして文化社会経済システムの法則性がある。

今井光映の提起した生活の価値を前提にして始まる生活世界の科学は吉田民人の提案する自己組織系の科学性を前提にして成立することになる。その成立条件は、生活情報の処理機能としての認識主体を、生活空間の構造と呼ばれる生活世界の対象認識から理解しようと試みながら、他方で生活情報としての生活世界の対象認識の中に生活情報の秩序プログラム性としての自己認識の影を模索することである。

しかし、主体認識と対象認識の二つは同時に成立しない。そこでシステム認識論を前提にして反省機能が成立すると考えた⁽³⁾。また、認識対象とする科学を援用することによって、認識主体の認知過程を描写する作業が取られ、その知の体系の中に観察する自己を理解することは可能である。自己自身で目指している行為や自己自身を含む集合である自己の存在の存立に基盤となっているオペレーションを・自己準拠とすれば、この自己準拠を進める過程で、自己に含ませた他者性の中で自己と他者性として語られる自己が課題になる⁽⁴⁾。この二つの異なるシステムの差異やパラドックス状態から生じる自己認識の運動を反省と考えるなら、生活世界の科学こそ生活主体の反省の成立に欠かせない認識であると言える。

生活世界の科学の成立は「生活を癒すこと」を課題にする理解科学の確立であり、その方法論は自己組織系の科学性を前提として成立する。その科学性は意識科学を超える自己の定義を要求され反省はその意味でシステム認識論という逆説として導かれることになる。しかし、この理論も現実の生活世界の科学と生活世界の改善運動として成立する。

¹ 今井光映、山口久子編 『生活学としての家政学』、有斐閣、東京、1991.9、pp11-17

² 吉田民人 『自己組織性の情報科学 エヴォリューションニストのウィナー的自然観』、新曜社、東京、1990.7、pvi

³ MITSUISHI Hiroyuki "DECONSTRUCTION ET RECONSTRUCTION DE LA META-PSYCHOLOGIE FREUDIENNE - ESSAI D' EPISTEMOLOGIE SYSTEMIQUE -", Lille Université de Lille III, 1993. 5, 584p,

三石博行「現代科学技術論批判の方法論としての反省学試論(1)」 in 『金蘭短期大学研究誌』、第28号、大阪、1997.12、pp1-33、

⁴ ニコラス・ルーマン 『社会システム論(下)』、恒星社厚生閣、東京、1995.10、pp797-870

生活世界の科学から問われるシステム概念

社会・経済システム学会第19回全国大会 研究発表資料

金蘭短期大学 三石 博行

目次

- 1、テーマ、「生活世界の科学から問われるシステム概念」に関する討論資料
- 2、現代科学技術批判の方法論としての反省学(1) 資料1
- 3、生活空間の機能—構造分析から導きだされる生活情報と生活情報史観の概念 資料2
- 4、フランス語表現に於ける(Langage の構造)精神活動について—自己組織系のシステム言語学への試論— 資料

■ 1日目：11月25日（土）

I 10：30～12：30

I-1 環境問題

座長：小幡範雄（立命館大学）

討論者：吉田 登（和歌山大学）

「公共関与による産業廃棄物処理事業にみる環境制御システムの深化と地域社会の対応」
土屋雄一郎（立命館大学大学院政策科学研究科）

「環境情報提供型政策と学習」

在間敬子（京都大学大学院経済学研究科）

「新世紀に遺すべき環境問題の表現デザイン～水俣病を事例として～」

嶋本貴美子・末石富太郎（滋賀県立大学環境学部）

I-2 消費・市場・経済

座長：長尾史郎（明治大学）

討論者：若森章孝（関西大学）

「消費の記号性の再考：80年代日本経済に準拠して」

水原俊博（立教大学大学院社会学専攻）

「自己組織系としての市場システムの形成—オートマトン・ネットワーク理論の応用とシミュレーション—」

浅利一郎（静岡大学）・間遠伸一郎（宇都宮大学）

「幸せな社会の構造～日本の経済思想に刻まれた経済倫理の探求～」

稲場紀久雄（大阪経済大学）

***** 休憩 12：30～13：30 *****

II 会長記念講演 13：30～14：30

社会・経済システム学会会長

中山慶子（静岡県立大学）

III 14：45～16：45

III-1・新世紀のシステムのデザイン（1）

座長：直井 優（大阪大学）

討論者：塩沢由典（大阪市立大学）

「意味と情報の社会システム論の課題」

出口 弘（京都大学）

「生活世界の科学から問われるシステム概念」

三石博行（金蘭短期大学）

「三層システム理論の提唱—人工物システム科学>原論：inter/multi/trans-disciplinarityの
目指すもの—」

吉田民人（中央大学）

テーマ、「生活世界の科学から問われるシステム概念」に関する討論資料

社会・経済システム論学会年第19回全国大会 新世紀のシステムデザイン(1)分科会

発表者 三石博行 (金蘭短期大学)

はじめに、問題提起

現象学と社会政策論から提起された生活世界の科学は、複雑系と自己組織系のシステム科学の中で展開されることになる。だが、この展開を試みるためには哲学的課題とシステム科学の公理に関する議論が必要である。この論文では、以下に示す課題に関する議論を深化するために、問題を提起をする。

- 1、現代科学技術文明への批判学としての生活世界の科学
- 2、現代科学技術思想への批判学としてのシステム思想の確立
- 3、人間社会学の基礎理論としてのシステム論の形成
- 4、生活改善運動に有効な実践的な生活世界の科学の確立

1、科学技術文明批判学としての生活世界の科学

1-1、現代科学技術文明の点検のための人間社会学

科学技術文明の成立を人類の歴史に刻みながら 20 世紀は終わろうとしている。しかし、他方で、科学技術文明の社会は、豊かな社会や生活への限り無い追求によって導かれた文明の負の遺産、例えば地球レベルの環境破壊や科学技術の南北問題などを、未来の人類の課題に残した。21 世紀のはじめから、これらの負の遺産を処理する思想や科学技術が問われることになる。この課題に知の総力を掛けて立ち向かわなければ、近い未来での豊かな社会を持続するは明らかに不可能である。

この科学技術文明に対する不安は、神秘主義など反科学思想を呼び起こしてきた。この反動的な現代科学技術文明批判からは現実的な解決の手段が見つからない。しかし、これらの不安や批判が、科学を点検するための活動、つまり科学哲学や科学認識論の研究を呼び起こしている。現代科学技術文明批判を課題にした哲学や思想運動の中から、近代合理主義の形成期から 18 世紀の科学主義の形成、さらには現代科学技術の歴史が点検されようとしている。

この点検作業は、1960 年代から 1970 年代に掛けて、科学技術を歴史、社会学、経済学などの視点から分析する科学技術論と呼ばれる学問に発展した。この新しい人間社会学は、さらに専門化し、科学技術史、科学技術社会学、科学技術文化人類学、科学認識論や科学・技術哲学となり、現代の人間社会学や哲学の主流になろうとしている。

しかし、主流になった科学技術論の分析方法や科学性は、科学主義の影を引く唯物史観、新実証主義などを活用して科学技術の分析を展開した(1)。現代科学技術文明批判は、その思想的基盤に問題を返すことなく、科学技術の活用の課題に終わったし、また、不十分な段階の問題として総括された。科学技術文明批判を課題にする科学技術論は、客観的

科学の哲学的課題を取り上げた現象学の問題提起を継承しなければならなかった。

1-2、生活世界の科学の課題としての現代科学技術文明批判

現代科学技術文明を哲学が課題にする時、まずフッサールが試みた「生活世界についての学」という新しい学問性の成立に関する哲学的問題提起を取り上げなければならない。フッサールによると、「生活世界の科学」は「客観的・論理的な課題」のみではなく、その生活世界の課題が設定されている全ての学として成立する条件を全体的に取り上げなければならない⁽²⁾。「客観的科学」は「客観的・論理的な課題」の一つの視点から「自然世界」を取り上げることで十分であった。しかし、「生活世界の科学」は学以前の生活自体における、単に主観的で相対的な経験を科学として取り上げる「科学性」が問われていることになる。

フッサールは「客観的諸科学」が根拠とする客観的判断、実証的推論や論理的な思惟などの述定的理論自体も生活世界の中に属し、そこに根をおろしている、共同主観的な生活世界の直感にその根拠を持っていると考えた。したがって、生活世界を学以前のドクサとして考えることは、客観的判断、実証的推論や論理的に考えるという行為がその基盤である生活世界を前提にしないために生じる。客観的判断、実証的推論や論理的な思惟自体が独自に成立していると考えると指摘した。この顛倒こそ科学主義と呼ばれる新たな形而上学や観念論であり、生活世界の科学はその批判的展開を提起していると考えた。

生活世界を対象とする時、現在の科学の主流が依拠する思想、客観主義、実証的推論や論理的思惟などだけでは解決しない課題である主観や相対的世界を抱えることになる。花崎の「生きる場の哲学」は「知ること」を「世界との関わり」として捉え、生活の場を破壊する現代科学技術の在り方を批判し生きている人々の姿が「哲学する」姿として提起されていた。つまり哲学は、生活世界とのよりよい関わりを見つけだす知の在り方として理解されていた。

1-3、批判学としての生活学・生活世界の科学

資本主義経済と工業化社会の発達によって破壊された生活世界の復権を巡って、ここ二世紀にわたって、問題が提起された。また、生活世界を課題にする科学は科学技術文明を影響について語ることを避けて通ることは出来ないのも、その科学は現代文明への批判学の使命を帯びることになる。

例えば、19世紀のヨーロッパでは、工業生産システムによって必要となる多量の単純労働に消費される若年労働者達が被る低賃金や劣悪な労働条件によって引き起こされた生活破壊、労災や職業病などが蔓延していた。それらの貧困化した勤労者を救済するために社会政策学が展開する。

また9世紀アメリカ社会でも、工業化によって失われようとしていた生活を課題にして、ピッチャーやリチャーズは生活学を提案した。このアメリカ生活学の基調には科学技術文明の引き起こす生活病理の臨床の知としての使命と、現代科学技術文明批判がその根底に流れている。

さらに日本でも、1937年の東北大冷害を契機に農村の生活改善運動に取りかかった今和次郎によって生活構造論や生活病理学が提案された⁽³⁾。戦中、籠山京によって貧困生活から勤労者を救済する目的をもって生活構造論が形成された⁽⁴⁾。戦後になって、パー

ソンの社会システム論の影響を受けた松原治郎や青井和夫が生活構造論を展開する⁽⁵⁾。しかし、1965年代後半の高度経済成長期に入って、貧困生活が解決する中で、勤労者救済の目的を喪失し、学問としての指向性が失われたのか、1970年代に入ると、次第に研究への関心が失われていった。

70年代に入って、生活構造論の伝統を受け継ぐ流れが生活学の中であった。今井光映は、生活科学の発展が実証科学にそって展開した過程を批判的に分析している。つまり、全体的な生活を分析的に捉える方法では生活学の精神である生活の改善を課題にすることが出来ないと考えた。生活学は、没価値的な実証科学ではなく、全体論的に「生活を癒すこと」を課題にする理解科学である必要性を述べている⁽⁶⁾。

生活を課題にした科学、つまり生活世界の科学は、現代科学技術文明の問題を避けては通れないのである。この新しい科学が成立するためには、近代科学の伝統である科学方法論の検討が必要となった。

2、生活世界の学の科学性の成立条件

2-1、近代哲学批判としての生活の概念

客観主義科学では生活世界の科学を充たすことはできないとフッサールは問題提起し、現象学を提案するこの課題は、近代合理主義や科学主義を越えて新たに求められている人間社会学の科学性が提起されていた。

近代西洋哲学は、伝統的に客観的認識の在り方や理想的な生き方の理念を課題にした。意識的な志向性、自由意志などが哲学の主な議論となった。この意識主義哲学への批判は、まず反哲学として現れた。哲学の主流に反発する実存主義が投げかけた問いかけは、客観主義哲学への反抗に留まらず、理念的人間に関する哲学的言及から生活する人間に関する哲学的言及に変更を要求することを潜在的に持っていた。

しかし、反哲学は哲学の主流に対する反抗に過ぎなかった。この反哲学の直感が、新たな時代の人間学の基礎となるためには、その直感に含まれている全体的な人間への理解の地平が伝統的な哲学を包み込む次元にまで展開される必要があった。こうして、現代哲学の課題はこの反哲学の異義申し立てから出発した。

つまり、フッサールが展開する生活世界を構成する共同主観性、フロイトが言う文化的シンボルの前意識的イメージやタブーなど無意識の文化的構造、マッハが示すパターン認識の名目性やデュルケイムの集合表象概念と機能主義社会学など19世紀の終わりから20世紀の初めにかけて提起された哲学的人間論の確立を前提にして、これらの先駆者の影響を受けた20世紀の人間社会学の流れ、例えば、レビ・ストロースの構造主義文化人類学やパーソンの社会文化システム論が形成され、リアルな人間とその生活世界を課題にする人間社会学としての生活世界の科学が展開されることになる。

2-2、生活科学の科学性の成立のための前提条件

19世紀にアメリカで生活学がピッチャーによって提案された当時から、科学技術文明の引き起こす生活病理の臨床の知としての使命をもっていた。しかし、生活科学として展開される中で、それらの使命は、細分化した生活科学分野の研究になることで風化していった。生活世界の科学の原点に戻り、そしてこの科学を発展させるためには、生活世界の科学の科学性は問題になっている。

第一点目は、生活という複雑系での科学的方法の問題である。学際的研究を前提にして成り立つ複雑系の学問の方法論は、異なる学問領域の論理を羅列して成立するのではなく、それらは、少なくとも領域の異なる解釈が相互にその公理を位置付けできるような、さらに基本的な定義の確立を前提にしなければならないのである。

第二点目は、観測者も観測対象である生活空間の中に存在していることによって生じている観測対象を観測主体の観念形態から切り離して観測できないという認識問題である。生活世界の観測対象は生活主体と切り離された客観的对象として理解することはできないため、生活世界の科学方法論では、生活主体が、その生活情報処理機能である生活認識の在り方を、生活空間の構造と呼ばれる生活世界の対象認識から理解しようとする現象学的な試みや、その科学的方法が必要になっている。

以上の二つの問題は生活世界の科学が生活の価値観と切り離して成立しない科学であり、その価値観は生活する思想から生じるため、この科学は生活思想を持たないかぎり成立しないことを意味している。では、この科学が成立するための、つまり今日の生活病理に対して有効な知として成立するための思想とは何かが問われていることになる。

2-3. 観察主体と生活主体の問題を含む科学性

価値概念をもつ主体による観察や科学行為を前提にして生活世界の科学は成立するため、その科学が成立するための条件、つまりその生活世界の学の科学認識や科学性に関して、議論を深めておく必要がある。ここでは、現在問題提起されている二つの課題について述べる。

第一点目では、生活世界の科学が近代科学以来の伝統的な科学方法論を前提にして成立しなければならないことが課題になる。生活を科学の対象とする以上、その方法はこれまでの分析的な科学方法論、実証的かつ論理的な研究の在り方が前提になる。そのため、この科学的方法での研究は、生活科学の専門的分野化を押し進め、細かい分野に専門化することが生活科学が進歩を意味することになる。と同時にその細分化によって生活という現実が失われることを意味する。生活は、衣食住心に渉る人間性とそれを取り巻く社会文化の全てであり、その一部を生活世界として語ることは出来ない。そこで、生活世界の科学は、生活全体を同時に取り上げられる科学的方法が必要である。しかし、生活全体を同時に取り上げることで、曖昧な分析や不確かな実証性を許すわけではない。この二つの課題、つまり、分析的であって全体的である科学的方法とは何かが求められている。

第二点目は、生活世界の科学が、今井光映によると、没価値的な実証科学ではなく、生活を全体的に理解する理解科学であり、「生活を癒すこと」を課題にする実践的な実学であると提起されていることから生じる課題である。この実践学の問題意識は生活学の創設以来の伝統であり、日本独自の生活構造論に於いても同質の直感の上に成り立っている。しかし、生活主体の主観的立場の批判的検討を無視することによって、生活学の中に、生活主体の共同主観的な「認識構造」や「倫理観」が紛れ込む。そのことも主観世界の科学の宿命であるとするれば、それらの科学は文化的に異なる空間でそれぞれ独自に成立することを前提にしなければならないだろう。つまり、実証科学が無前提におく解釈主体の「認識世界」に対して、生活世界の科学がそれを「生活情報」として解釈するとき、その科学的公理系は文化的位相性を前提にして成立する複雑なものになる。また、生活主体の「倫理性」

を前提にして成立している「生活様式」も同様に人間一般の普遍的課題と言うよりも、文化的位相性を前提にして成立するものとして翻訳されることになる。だが、この理解科学の科学性が相対的に成立するとすれば、生活学という学問は生活する主体の認識構造や精神構造の分析を前提にして成り立つことになる。

3、システム科学の観察主体の成立条件・反省学

3-1、生活世界の科学の思想条件。

生活世界の科学は、生活世界を構築する生活重視の思想が問われる。しかし、この場合、二つの課題が問われている。

第一点目は、思想を前提にして成立している生活世界の科学に対する批判である。客観主義を没価値的実証主義を自称する近科学の伝統の中では、客観的であるべき科学的論理と、立場や考え方である思想とは相容れない考えるので、思想と呼ばれる主観的な立場を科学の前提に置くことを歓迎しない。

生活世界の科学は、「生きている場の認識」が前提になって成立している科学である。現実には、生活者の日常性は「生かされている場」によって運営されている。つまり、殆どの生活者が、現実の生活の状況に対して積極的に自己の責任を取れるほど、意識的に生きているとは限らない。意識哲学的な立場に立てば、認識主体は認識対象を対自的に位置付けているために、それらの認識対象とは別に認識主体の自己の存在しているように思う。

しかし、フロイト精神分析学では対象認識の中に自己の欲望として対象は存在する。ソシュール言語学では、意味は差異によって生じるものでありことばと意識は同質のものであることが示される。フッサールの現象学では対象認識の中に主体の認識構造が紛れ込み、また主体的行動や欲望の中に対象世界に規定された条件が紛れ込んでいる認識世界が示されている。これらの現代哲学の提案者の発想から、意識哲学への批判を通じて導かれる世界は、「生きる場」ではなく、「生かされている場」の理解となる。世界との関係の在り方が意識的な理解を越えた無意識や規定された世界となる。この理解の地平こそ「生活世界」と呼ばれる実態をリアルに導き出す手立てとなるのである。

この新しいコギトの解釈を前提にして、思想を意識的世界の在り方から存在を規定する条件として解釈するなら、文化的存在規定としての共同主観的環境を思想条件として、それを前提にするという生活世界の理解が可能になる。

人間の現実の理解は、生かされているという状況の理解、つまり認識されている対象の中に於ける自己の実存性の発見としてある。その時、対象認識であった筈の科学的認識は、自己をその中に含むリアリズムとして自己を規定する知となる。科学的知が情報である現在では、パスカルの言う幾何学の精神は繊細な精神との統一は為されることはないが、生活世界を自己を規定している世界とすることによって、対象認識や欲望もその場から規定されていると解釈することで、知ることが情報ではなく関係して現れるのである。この関係としての知の在り方が生活世界の情報構造である。

第二点目は、思想と言う理念的な概念と生活という実際的な概念の相互に抱いている敵意を理解し、その両立の前提条件の課題始め為ればならない課題である。

これらの二つの課題に答えるために、今日に於ける思想と生活の分裂とは何によって

引き起されたかを考える必要がある。生活を日常性として考えれば、理念である思想性は具体性である日常性とは相容れない。しかし、哲学は生きる具体的な人間の営みの為に存在していることは疑う余地はない。哲学は、日常性を抱え込み、そのドグマを点検しなければならない人々にとって必要とされるものである。したがって、思想性と日常性の二つの異なる位相は、反省と生活の関係として相互に関連している事に気が付くのである。

現代人の自己認識である社会・文化的存在としの人間の位置付けも、人間集団の営みとしての経済、政治、社会や文化現象を分析する経済学、社会学、民族学、文化人類学、社会心理学等の研究から確立していった。リアルな人間の理解が、理念の確立を求めた哲学的人間観の倒錯を指摘した。新たな哲学は、新たに形成される人間社会学のパラダイムの中で、再生された。

そこで、哲学を改めて「人間社会学の基礎論」として語ろうという試みも為されている。こうした、流れの中で、最近、村上陽一郎は、「安全学」⁽⁷⁾や「科学技術と生活空間」の中で、生活の課題を積極的に現代の哲学の課題として位置付けようとしている。

学際的科学として出発した生活学は、よりよく生活することを課題にした実学であるため、その科学性に関する議論を避けることが出来ない。生活世界の科学認識論や科学哲学を課題にすることが、その科学の成立に繋がるのである。

そして、生活学の課題は、巨大な科学技術文明の中で生活重視の実践的知を確立することであるため、その生活重視の思想からその科学性についても探究しなければならない。この問い掛けに迫られて、現代の哲学は生活世界を課題に哲学の基本に戻され、生活世界の科学は哲学的課題の介入によって生活世界の実践的知の領域を広げるのである。

3-2、生活世界の思想と科学の相互点検活動

生活世界の科学が前提とする哲学的な主体認識つまり生活思想の点検と科学的な対象認識つまり生活科学での世界解釈の二つは相互に矛盾し合う思惟の形態を持つために同時に成立することはない。

しかし、生活思想を課題にする哲学的反省は生活科学の展開の前進的な展開を前提にして成立する。また、生活世界の科学は、その場が時代性や文化性に規定され、つねに認識主体を絡めとりながら変動するために、新たな状況に適応する生活世界の科学の公理を追い求めるなら、その科学性を常に検証する必要性に迫られる。そのため、生活重視を前提とした生活思想の点検と生活科学での世界解釈は常に相互に展開する課題となる。この科学と哲学の相互点検の在り方こそ、反省学として定義した哲学ある⁽⁸⁾。

対象認識の中に主体に在り方を問い、主体の認識の中に対象世界の在り方を問題にする現象学的直感をシステム論的に構成したものをシステム認識論と呼んだ。そのシステム認識論を前提にして科学的思惟と哲学的反省の相互点検である反省機能が成立すると考えた⁽⁹⁾。

このことは、現代哲学の在り方を問題提起している。つまり、哲学的知の有効性を科学的知の有効性と直接比較する限り、哲学的知は科学的情報と同一の地平になることによって、脱哲学の現象が進行する。哲学が生きている場である生活の課題を問題に出来ない時、教養としての哲学が登場し、哲学的知は情報化する。哲学的知の意味は、科学的知の発達によって、益々その存在理由を問われようとしている。

例えば、近代合理主義思想以来の哲学の伝統の中で展開してきた「意識や認識」の課題は、神経生理学、心理学や認知科学などの医学や人間科学の発展の中で、具体的な答えを与えられた。それらは「心の科学」と称しながら、哲学の分野で論議された課題を伝統的な実証的方法論で展開し続けている。

また、近代哲学が哲学の最後の砦と考えた意識以前の課題も、構造言語学や精神分析学の展開の中で、より具体的な人間学の公理系にまとめ上げてしまった。もはや、哲学の存立基盤である形而上的で観念的な公理系は、人間学の展開の中で、消え去ろうとしている。

哲学を生きる場の思想や反省として位置付けるには、生活世界の科学の思想や認識論・反省学を提起しなければならない

3-3. 自己認識問題を含むシステム概念の形成

生活世界の科学の成立条件としてシステム論が持ち出される。そこで、まずパーソンズのシステム論の問題点を考える必要がある。システム論を点検するとき批判的に乗り越えなければならない社会認識論として意識哲学や主客二元論がある。意識哲学批判はすでにパーソンズにおいても「社会システムの構造と変化」の中でパーソナリティ・システムに関する言及の形をとってなされているが、それらは自己言及的な課題を含まないために不十分なものを感じる。

つまり、パーソンズの考え方では、文化システムを構成する集合体の基底構造に無意識化された社会文化の要素を持ってきているのだが、従来のシステム論的分析方法に留まるため、それらの要素分析は還元主義的になり、彼の社会システム論は、結局、要素結合主義、コネクショニズムによって展開されることになる。そのため構成要素群の未定を前提に「考えられる」それらの要素が、いつのまにか限定要素になって表現されてしまうのである。

この問題は対象認識の問題に終わることはない、つまり未定を前提としていた「考えられる」システムの要素を前提にする観察者の課題も認識論的に問われている。対象の限定は、認識主体の限定の在り方として登場していることを知る必要がある。つまり、限定化された観察対象の登場によって、観察者の観察空間が絶対化される。それを二元論的には客観的要素と

表象が観察者の欲望や精神構造が現われていることをすでにフロイトは代表表象概念で説明したが、対象と主体が切り離された時、すでにその限りにおいて文化システムの分析の前提条件とも言うべき、文化的観念形態の分析は不可能になっていることに気付く必要がある。

極論すれば、パーソンズの社会システム論では、自らの理論を援用する科学理論の点検を可能にする方法論は問題にされない。ある科学的と呼ばれる時代的文化的な観念形態を相対化することも、批判的に点検することもできないのではなからうか。

3-4. ルーマンの自己準拠的システム論と生活世界の科学性について

ルーマンが課題にしたように、意識や人間の主体に関する分析も科学が課題にする限り、例えば大脳生理学、認知科学、社会心理学、精神分析等々の対象のように、それらのある科学的な対象としなければならない。反省機能とは自己の在り方を他者性をもって観

測することであると考えれば、反省機能を持つシステムとは「あるシステムについて他のシステムによる描写」という難解なパラドックスを抱え込んでいる。この自己準拠のパラドックス問題を前提にしてシステムに内在する「複合性」を課題にしてみよう。

ルーマンによると、自己とは「自己自身で目指している行為や自己自身を含有する集合」つまり意識的にしろ無意識的にしろ自己の行為の主体として登場するものである。準拠とは「そうして自己の存立の基盤となっているオペレーションのこと」である。つまり、自己準拠はシステムの中に所謂「他者性」を含むことによってそのシステムが一種のパラドックスになること。そのパラドックスによって生じるシステム内部の回帰運動を意味する。また、フィードバックはシステムのプログラムに即してその合目的性を満たすためにシステム内部に組み込まれたデータの再解釈プロセスである。機能主義的な考えではフィードバックを反省機能と考える傾向があるため、ここでは自己準拠とフィードバックのそれぞれの概念を分けてみた。

また、システムの再生産過程はそのシステムの内部で規定された諸要素の類型に依存しながらも、外部の要素を取り入れそれらを帰納論理プログラムしなければならない。するとそこで「システムとその環境の差異」を導き出す自己観察というシステムのコントロール機能が問題になる。するとルーマンの自己準拠的システムは対象認識する主体認識の在り方に関する観測機能を持つことを前提に成り立っていると思われる。

つまり、認識対象とする科学を援用することによって、認識主体の認知過程を描写する作業が取られ、その知の体系の中に観察する自己を理解することは可能である。自己自身で目指している行為や自己自身を含む集合である自己の存在の存立の基盤となっているオペレーションを自己準拠とすれば、この自己準拠を進める過程で、自己に含ませた他者性の中で自己と他者性として語られる自己が課題になる⁽¹⁰⁾。この二つの異なるシステムの差異やパラドックス状態から生じる自己認知の運動を反省と考えるなら、生活世界の科学こそ生活主体の反省の成立に欠かせない認識であると言える。

生活世界の科学の成立は「生活を癒すこと」を課題にする理解科学の確立であり、その方法論は自己組織系の科学性を前提として成立する。その科学性は意識科学を超える自己の定義を要求され反省はその意味でシステム認識論という逆説として導かれることになる。しかし、この理論も現実の生活世界の科学と生活世界の改善運動として成立する。

ルーマンの自己準拠的システム論を援護するために、哲学的に認識論の在り方を再点検する。ここで問題になることは、反省機能を持つシステム論的な認識論はあくまでも主体はシステムの内部にあると言う事である。そのために、反省を対象化した機能として捉えることはできない。つまり、それはフィードバックを反省機能と考えることではない。あくまでも、反省機能とはシステム内部のパラダイム変換を前提にしている。

そのために、「知ることが主体にとっては変ることを意味する」ので、その意味で、哲学的には啓示的哲学の歴史を振り返り、哲学を自省的思惟の技術として位置付けることにする。その立場から認識論を語る。その課題はコギトの再定義から始めなければならない。

ここで哲学的知と科学的知の在り方が基本的定義され、その定義は、それらの二つの知の在り方の二律背反的形態である。しかも、それらの知のその二律背反性を持って確立するシステムの存在様式である。我々は、そのシステムの存在形式をシステム認識論とし

て位置付けた。これは現代に於ける科学哲学の在り方を示唆すると思われる。

3-5. 反省機能を持つ社会システム論は可能か

まず、この反省機能を持つシステム論の課題が、システム工学の最前線で問われていることを紹介する。それは、今までの認知科学への問題提起を意味する。その課題は、逆に言えば、ヒューマンシステムの機能に限りなく近づこうとして研究されて来た工学的認知システムが、改めて、ヒューマンシステムの特性を再発見することであり、その工学システムの限界を知ることもである。そのために、その工学システムとヒューマンシステムの間には確立しなければならないインターフェイスの在り方の課題でもある。

社会システムに於いては、それ課題はどのように問われている。まず、自己組織系の社会システムの在り方に関する問題を立てて見よう。何が自己組織するのか、社会的ドグマとしての社会文化観念形態の自己組織系を仮定するれば、そもそも社会機能にはその観念形態・イデオロギーの反省的システムは存在しない。そのことを社会認識論的に知る必要はないか。その社会認識に立つ、社会システム論とそうでない社会システム論では、システムに関する概念が異なる。我々は、ルーマンの自己準拠的システムを、その課題に結びつけて解釈しようと思う。

言い換えると、社会対象認識を通じて社会的自己認識は可能性か。つまり、社会文化の構造を通じ自己の在り方が課題になるためには、それらの知識は単に対象分析の技術ではありえないはずだ。自己分析を前提にして成り立つ人間学として精神分析がある。それは認知科学とは異なる。そこには臨床的な課題が含まれている。つまり、知ることは現実の自己を変える作業でなければならない。それは主体を認識する哲学的な知を意味する。

また、自己認識を通じて対象認識の可能性とは何を意味するのだろうか。自己の感情や感覚を通じてその環境について理解するためには、自己とはある科学的視点で対象化されていなければならない。つまり、自己とは生物として社会的文化的存在として対象化されてはじめて自己感覚を単なる自分個人のものでなく「生み出されたもの」として理解することが出来る。

これらの二つの公理が、相互に依存しあう時、ルーマンの自己準拠の概念が復活する。それは自己認識と呼ばれるシステムの中に「他者性」を含むことを意味し、その一種のパラドックスによってシステムが稼働していることを意味する。つまり、システムとはこの回帰運動を意味することになる。

4. 自己組織系のシステム科学としての生活学

4-1. システム論的生活学からの問題提起

今井光映は、現在までの生活科学の辿ってきた過程を検討する中で、生活を分析的に捉える方法では人間生活の部分的な側面に生活学の課題を押し込めてしまう危険を孕んでいることを警告し続けた。今井は生活を一つのトータルな複雑系のシステムと考え、全体論的な学問として生活学をイメージした。彼の生活学の方法論は生活主体の価値を前提に成立する批判学・解釈学であり、その方向は因果関係を明らかにする事で終わる没価値的な実証科学ではなく、全体論的に「生活を癒すこと」を課題にする理解科学であると考えた。生活改善の実践的知性を課題にする考えは、貧困生活から勤労者の救済を考えた麓山京や生活改善運動の生活病理学を構想した今和次郎の生活構造論にその原形を見ることが

できる。今日、生活改善の政策学として生活学を受け継がれている。

今井光映は生活学を、実践科学と理論科学の相互矛盾要素によって作り出される知の相互運動システムを前提に成立するを理解科学として位置付けた⁽¹⁾。全体論的な学問としての理解科学としての生活学は、近代合理主義の形成以来現代科学技術文明の確固たる理念となった「知は力なり」という実践理性の擁護と、因果関係の明晰な分析的方法や没価値的な実証科学の方法に対する批判を前提に成立しているのであるが、それが根拠とする理論科学も近代合理主義の理念や現代科学技術の先端から導き出される知性の配列集合であり、主体の自己認識のための哲学的知と認知問題を扱う心理学的知性の相互批判システムを示す科学性は語られなかった。

理解科学の成立条件として、既に述べたのだが、以下二つの課題が問題にされている。第一番目に、一つの事象に関して、異なる幾つかの公理系からの相補的解釈を導く新たな公理の発見を課題に学際的研究の科学性が問題になり、第二番目に、観察対象を通じての観察主体の自己認識のあり方を問う科学性が問題になる。生活世界の価値観を前提にして成立しようとする生活学の科学性の成立条件が問われることになる。

4-2、生活世界の科学の成立条件

生活世界の科学は「生きる場の哲学」を前提にした科学である。言い換えると価値観を前提にして成り立つ科学である。その価値観は、生活の場とよばれる共同主観の中で、要求されている主体の在り方である。この共同主観的な要請を分析することによって、没価値的な実証科学や分析的方法を乗り越えて認識論的課題で提供される。

生活世界の科学にとって全体的に生活を言及する方法について考える必要がある。全体的な言及行為は、決して決まった形式を持つわけではない。生活世界の科学行為の主体が時代的、文化的な状況に規定されている限り、その認識構造や観測者の場を無視して生活世界の科学は成立しない。そのため、生活世界の科学を構成する学際的研究は、ある統一的な筋道をもって体系化することではない。どの時代にも、またどの文化にも普遍的な生活世界の科学の在り方が存在している訳ではない。それらは、文化的に、また時代的に異なる体系化や纏まりを要求することになる。ダイナミックな自己組織系の生活システムの科学の成立条件に検討を加える必要がある。

生活世界とは複雑系のシステムであり、また生命と生活活動の自己組織系のシステムである。このシステムの特長条件を前提にした科学が生活世界の科学の成立条件を充たす。生活世界は生活要素からなる複雑系である。そのため生活世界は、生活資材とよばれるあらゆる生活環境に規定されて成立している。そこで、吉田民人の人工物システム科学原論に関する解釈研究を進めながら、生活資材・人工物のシステム科学として生活世界の科学を位置付ける作業を行う必要がある。

生活世界の科学の基調は生活重視の思想の確立とその科学性の成立と展開である。つまり、より良い生活空間を獲得するために、生活重視の思想や価値観が生活世界の科学の成立の基本となる。そこで、生活の豊かさの概念を考えなければならない。生活の価値概念の広がりが生活世界の守備範囲の広がりとなる。つまり経済的な豊さのみでなく文化的環境や生態環境の豊かさも生活の豊かさの基準に入ることによって、生活世界の科学の対象は広がる。生活重視の思想やその科学から生活世界を語るとき、生活世界の価値概念の

批判的分析が必要となる。

4-3、生活情報論、社会情報論(情報社会文化論)

生活世界の科学の一つの課題として、生活情報論がある。生活情報とは複雑系の生活システムの生活資材や生活様式のパターンである。それらのパターンの研究を進めるための生活情報論は、生活世界の複雑さと自己組織性を前提にしたシステム論を土台にして形成される。しかし、パーソンズ型のシステム概念は情報の引き起こす新たな社会現象、バーチャルリアリティ、ナルチシズム的文化現象や生活行為などを解釈することが十分に出来ない。そこで、その課題を吉田民人の生活空間概念を援用し展開した生活情報概念で説明した。この生活情報論では、人間の行為がコミュニケーションを前提に存在する事を理解するための基本的な認識情報現代高度情報文明での生活行為と生活様式を語るシステム概念の研究が今後必要である。

生活情報論は、生活改善を課題にした生活学、実践的政策学・経営学である。阪神大震災時の生活情報の研究は、その意味で災害時の生活情報の危機管理体制に関する考察として結実していく。生活の哲学のない政策学は生活者の現実を改善する力を持たない。また生活現実に土台を持たない哲学は生活思想を空論化させ、実践的な政策学としての生活システム科学の科学性を構築することはできない。生活情報の危機管理の課題は、生活世界の科学で問われるシステムの科学とその思想が問題になる。

「阪神大震災での生活情報の調査・分析から生活情報の構造についての研究」の研究は四つの課題から企画されていた^(1 2)。この研究で、生活構造論の歴史的研究を踏まえて生活情報のモデルを提起した。そのモデルに即して新聞や住民生活情報紙の生活情報の分析を進めた。デジタル化した新聞情報の分析を通じて、デジタル社会情報の分析の方法を提起した。さらに、住民情報紙の分析基準を提起し、その情報の統計的な分析方法を作り出した。

5、吉田民人の人工物システム科学原論との関係

5-1、人間社会学系のシステム科学総論の試み

吉田民人は、自己組織系の科学の成立条件として、まずシステムの秩序プログラム・規則の解明が課題となり、さらにその規則の生成とその動作・保持・変容を支配する法則が問題になると考えた^(1 3)。この視点から生活世界の情報科学は、生活情報の秩序プログラム、つまり生活資源のパターンの生成、伝達、貯蔵と変換に関する規則性、生活資源を構成している要素間の関係方程式が課題になる。生活情報の秩序プログラムは生活空間の歴史性や文明性によって決定されており、生活空間と生活情報の相補的關係から成り立つ社会文化理論が生活情報に関する法則として導き出されることになる。

また、歴史性や文化性を前提にして成立している生活情報処理システム・生活情報処理主体やその秩序プログラム・認知構造とは、社会文化的パラダイムに規定された言語情報-内生選択機能を持っているため、生成・選択・固定された自己認識や対象パターンと秩序プログラム・表象の体系・イデオロギーとは相補的關係にある。従って現実の生活世界では、生活処理機能によって言語情報的に選択された生活空間のパターン・生活世界の情報が発生し、それが同時にその生活情報処理機能を決定している。その運動の關係が秩序プログラム性の自己組織系と呼ばれるものである。このようにして、意識は社会的環境

に規定され、社会的環境は意識によって再生産されるのである。この相互運動を導くものとして文化社会経済システムの規則性がある。

今井光映の提起した生活の価値を前提にして始まる生活世界の科学は、吉田民人の提案する自己組織系の科学性を前提にして成立することになる。その成立条件は、生活情報の処理機能としての認識主体を、生活空間の構造と呼ばれる生活世界の対象認識から理解しようとして試みながら、他方で生活情報としての生活世界の対象認識の中に生活情報の秩序プログラム性としての自己認識の影を模索することである。

5-2、人間社会学の基礎理論としてのシステム論

「システム論的認識論」を導き出す論拠になったフロイトの理論に関して、その科学性と哲学的意味を点検する必要がある。そこで、「フロイト精神分析学の科学性の分析から -人間学における解釈学的方法論は可能か-」に関する研究が提案された。また、特にフランスでのフロイト学派の観念的傾向に対して、「フロイト精神分析学の科学性批判」を試みることから、アメリカでのフロイト精神分析と神経生理学の学際的研究の追求の意義を評価した。

フロイトの精神分析学の公理系を人間社会学に適応する試みはすでに、構造主義、トランピック・タオの現象学的唯物論、ハーバースのフランクフルト学派、パーソンズの機能主義、バシュラーの科学認識論、フーコーのポスト構造主義等で、なされている。これまでの人間社会学の基本公理としてフロイトの提案した数々の理論がいかされていると言える。そこで、フロイトの理論をシステム論的に解釈することを提案できる。

これらの試みは、「人間社会学の基礎理論としてのシステム論」としてシステム論を展開するための理論的位置づけの作業である。何故なら、反省機能を持つ社会文化システムの在り方を検討する中から「生活重視の思想を持つ社会文化システム」の構築が可能となると考えたからである。システム論を人間社会学の基礎論として位置付けるには、認識主体を認識対象の中で見出し、認識対象を認識主体の構造として自覚するシステム認識論とそのダイナミズムを保証する反省学が基盤となっている。この課題は自己準拠理論を提案したルーマンのシステム理論と共通するため、今後、その解釈と展開が必要とされている。

5-3、システム言語学と生活世界のシステムとの関係

生活情報や社会情報を課題にする時、言語の問題は避けて通れない。しかし、言語の課題を生活世界の科学と共通する視点で理解するためには、二つの条件が要求される。第一点目は、生命系のシステム概念に言語の課題が含まれる必要がある。第二点目は、社会システム概念の中で言語や情報の在り方が示されている必要がある。

生活の基本的な要素は衣食住と心である。それいづれも言語世界と切り離して生活世界の基本的要素として存在することはない。特に、ことばの問題は、集団や社会のコミュニケーションを課題にする社会言語学のみでなく、生活習慣病を課題にする精神分析に於いても重要な問題を提起している。

このシステム言語学の試みは、言語表現の分析から、精神構造の在り方、無意識の言語活動によって機能しているランガーシュの構造についての解釈や、意識的言語活動を生み出しているラングの意味や統辞の構造の解釈を行った⁽¹⁴⁾。それらの解釈によって成立したモデルが今後、生活世界の科学を展開していくために重要な役割を果たすと思われる。

る。

また、ここで展開するシステム言語学は、吉田民人が提案する人工系システム科学原論の課題にが含まれる。

引用文献

- 1 三石博行「マルクス経済学批判と科学技術論」 in 『龍谷大学経済学論集』第34巻1号、京都、1994.6、pp45-63
- 2 E フッサール 細谷恒夫、木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』、中央公論社、東京、1967.4、pp174-221
- 3 今和次郎 『生活学 今和次郎集5』1971.9、505p
『考現学 今和次郎集1』1971.1、544p
- 4 麓山京 『国民生活の構造』長門屋書房、
- 5 青井和夫、松原治郎、副田義也編『生活構造の理論』有斐閣双書、東京、1971.11、324p
- 6 今井光映、山口久子編 『生活学としての家政学』、有斐閣、東京、1991.9、
- 7 村上陽一郎『安全学』、青土社、東京、1998.12、246p
- 8 三石博行「現代科学技術論批判の方法論としての反省学試論(1)」 in 『金蘭短期大学研究誌』、第28号、大阪、1997.12、pp1-33、
- 9 MITSUISHI Hiroyuki *DECONSTRUCTION ET RECONSTRUCTION DE LA META-PSYCHOLOGIE FREUDIENNE - ESSAI D'EPISTEMOLOGIE SYSTEMIQUE -* , Lille Université de Lille III, 1993.5, 584p,
- 10 ニコラス・ルーマン 『社会システム論(下)』、恒星社厚生閣、東京、1995.10、pp797-870
- 11 今井光映、山口久子編 『生活学としての家政学』、有斐閣、東京、1991.9、pp11-17
- 12 社会・生活情報に関する研究は以下に示す四つの課題がある。
 - a、阪神大震災時の生活情報の調査・分析について
三石博行「阪神大震災以後の生活情報発生の調査と生活情報構造分析」 in 『第5回情報文化学会全国大会講演予稿集』、東京工業大学、東京、pp20-23、1997.11、ISSN 1341-593X
三石博行「阪神大震災時の住民情報の分析 — 住民情報の発生、進化、消滅の過程を決定している要素 —」、in 『日本災害情報学会1999年度研究発表大会』、東北大学、仙台、1999.10、pp121-130
三石博行「阪神大震災時の風呂に関する新聞情報の分析」 in 『龍谷大学経済学論集』第40巻1号、京都、2000.6、pp141-153
三石博行「阪神大震災時の心に関する生活情報の分析から」 in 『第8回情報文化学会全国大会講演予稿集』、聖学院大学、埼玉県上尾市、2000.11、ISSN 1341-593X (発表予定)
三石博行「阪神大震災時の住民情報の分析(2) — 第一期住民情報の統計分析とその特徴について —」 in 『日本災害情報学会1999年度研究発表大会』、東北大学、仙台、2000.11
 - b、生活情報の構造分析とモデル化
三石博行「生活情報構造モデルと生活情報史観」 in 『社会・経済システム論学会1997年第16回全国大会報告要旨集』、関西大学、大阪、1997.11、pp3-6、
三石博行「社会システム論的生活構造論学説史批判と現代生活情報論の科学性批判」 in 『社会・経済システム論学会1998年第17回全国大会報告要旨集』、精華大学、京都、pp3-6、1998.10、
三石博行「生活情報パターン移行現象と情報文化パラダイム」、in 『第6回情報文化学会全国大会講演予稿集』、明治大学、東京、1998.11、pp32-35、ISSN 1341-593X。
三石博行「生活構造論から考察される生活情報構造と生活情報史観の概念について」 in 『情報文化学会誌』、カミヤマ、東京、第6巻1号 1999.11、pp 57-63、ISSN 1340-6531
三石博行「生活空間の機能- 構造分析から導きだされる生活情報と生活情報史観の概念」 in 『情報文化辞典』森北出版、東京、2001.3 (出版予定)

c、高度情報化社会での生活重視の社会システム

三石博行「生活重視の思想と生活情報」、第四回情報文化学会、名古屋、金城学院大学 in 『情報文化学会 第4回全国大会講演予稿集』、pp5-12、1996.11.2、ISSN 1341-593X

三石博行「阪神大震災で問われた情報文化の原点」、in 『第7回情報文化学会全国大会講演予稿集』、東京大学、東京、1999.11、pp29-36、ISSN 1341-593X

MITSUISHI, Hiroyuki "ON THE EVOLVING FORM OF THE "NEWSLETTERS" BY RESIDENTS AND THE SOCIAL SYSTEM OF THE RISK MANAGEMENT OF DAILY LIVING INFORMATION", (英文) in *Eight International Symposium on Natural and Technological (Hazards 2000)*, pp116-117, 2000.5.21-25.

d、デジタル社会情報の分析方法に関する検討

三石博行「シソーラス検索による新聞情報の分析方法とその批判」、in 『第3回日本社会情報学会大会発表要旨集』、東京大学、東京 1998.10.3-4、pp52-55、

三石博行「阪神大震災時の風呂に関する新聞情報の信憑性の分析」、in 『第4回日本社会情報学会大会報告論文集』、関西大学、大阪、1999.10、pp12-13、

三石博行「新聞情報データベースの分析方法の成立条件について」in 『金蘭短期大学研究誌』、第31号、大阪、2000.12、ISSN 0287-0487

¹³ 吉田民人『自己組織性の情報科学 エヴォルーションニストのウィンナー的自然観』、新曜社、東京、1990.7、pvi

¹⁴ システム言語学の構築に関する研究は以下に示す。

a システム言語学の検証のための言語分析

MITSUISHI Hiroyuki, VAN DROM Eddy " Sur les expressions logiques d'opposition dans la langue française" (仏文) in 『金蘭短期大学研究誌』、第28号、大阪、pp153-183、1997.12、

MITSUISHI Hiroyuki, VAN DROM Eddy " Exemples concrets du modèle de langue dans la langue française" (仏文)、『金蘭短期大学研究誌』、第29号、大阪、1998.12、pp61-79、3、

MITSUISHI Hiroyuki, VAN DROM Eddy "Approche linguistique de la causalité dans la langue française" (仏文) in 『1999年 日本フランス語フランス文学会秋季大会 研究発表要旨』、愛媛大学、松山、1999.10、p3、

MITSUISHI Hiroyuki, VAN DROM Eddy "Analyse du domaine linguistique de l'intention dans les expressions françaises" (仏文) in 『1999年度日本フランス語フランス文学会関西支部大会 研究発表要旨』、関西学院大学、西宮、1999.11、p2、

MITSUISHI Hiroyuki, VAN DROM Eddy " Clasificación des Principaux Marqueurs Exprimant la Causalité" (仏文)、in 『金蘭短期大学研究誌』、第30号、大阪、pp75-98、1999.12、

三石博行、VAN DROM Eddy 「フランス語の譲歩表現の文語的及び口語的ニュアンスの統計分析」 in 『金蘭短期大学研究誌』、第30号、大阪、pp99-115、1999.12、

三石博行、VAN DROM Eddy 「CORPUS による検索と質的変動指数による口語及び文語表現の傾向分析」 in 『2000年 日本フランス語フランス文学会春季大会 研究発表要旨』、明治学院大学、東京、2000.5、p17、(共著 VAN DROM Eddy)

三石博行、VAN DROM Eddy 「CORPUS による検索、質的変動指数と信頼係数 q による口語/文語表現傾向分析方法」 in 『フランス語フランス文学研究』、No75、白水社、東京、2000.10、

三石博行、VAN DROM Eddy 「意図(intention)・主体的目的(but)や達成的目的(destination)を示すフランス語表現に関する分析 —システム言語学モデルの検証のための試論(1)—」 in 『金蘭短期大学研究誌』、第31号、大阪、2000.12、

b システム言語学のモデル構築のための試論

-
- 三石博行、VAN DROM Eddy 「フランス語表現の Existence の構造について」 in 『1998年 日本フランス語フランス文学会春季大会 研究発表要旨』、成城大学、東京、1998.5 36p、
- 三石博行、VAN DROM Eddy 「フランス語表現の基盤にある Parole 構造について」 in 『フランス語フランス文学研究』、No73、白水社、東京、p108、1998.10.
- MITSUISHI Hiroyuki, VAN DROM Eddy “Sur le modèle logique dans la langue française”, in 『1998年 日本フランス語フランス文学会秋季大会 研究発表要旨』、大阪大学、大阪、1998.10、p7、
- 三石博行、VAN DROM Eddy 「フランス語におけるパロールから象徴的意味・前論理的表現への過程について」 in 『フランス語フランス文学』、No74、白水社、東京、1999.10、p121、
- 三石博行、VAN DROM Eddy 「目的 (but)・ afin de の表現に関する意味論的分析」 in 『関西フランス語フランス文学』、第6号、青山社、京都、2000.3、
- 三石博行、VAN DROM Eddy 「フランス語表現方法に於ける Langage の構造 (精神言語活動)について —自己組織系のシステム言語学への試論」 in 『金蘭短期大学研究誌』、第31号、大阪、2000.12、